日本中國學會報　第六十七集
二〇一五年十月十日　發行　抜刷

十八・十九世紀朝鮮燕行使の清朝における交流

――藤塚鄰博士遺品の紹介を通じて――

金　文　京

十八・十九世紀朝鮮燕行使の清朝における交流

――藤塚鄰博士遺品の紹介を通じて――

金　文京

一　はじめに

十八、十九世紀の東アジアは、西洋文明の衝撃により近代へと移行する直前の近世末期に當たる。この時期の東アジア文化交流のひとつの特徴は、漢字文化圏に屬する朝鮮、日本、ベトナムなど中國近隣諸國において、千年を超える中國文化攝取受容の結果、その上層知識人の儒學、佛教などの教養および漢文漢詩の創作能力が、同時期の中國の一流知識人とくらべても遜色のないものとなり、中國を含む圏内各國の同じ價値觀、同じ教養を共有する知識人同士の個人的交流が、これ以前の時期にくらべてより廣い範圍で活潑に見られるようになったことであろう。

特にこの時期、日本と清朝が正式の外交關係をもたず、長崎を通じての限られた交流にとどまったのに對し、清朝、日本の雙方と外交關係のあった朝鮮の知識人は、毎年のように北京に派遣された燕行使節、また德川將軍襲封に際しての通信使節を通じて、清朝、日本の知識人と相對的に頻繁に交流する機會をもった。近年、東アジア前近代交流史の視點から、朝鮮の燕行使と日本通信使への關心が高まっているが、うち清朝と朝鮮の文人交流についての先驅的研究として、藤塚鄰博士（一八七九―一九四八）の『清朝文化東傳の研究』[1]をあげることができる。同書は著者が京城帝大教授在任當時に收集した大量の關連資料、文物をもとに執筆されたもので、その研究上の價値は今日においても決して耀きを失っていない。

筆者は昨年（二〇一四）、藤本幸夫氏の紹介により、藤塚博士ご遺族の手もとにあった遺品を購入することができた。博士の藏書は戰災により大半が燒失したが、殘りは戰後、ハーバード燕京圖書館の藏に歸した。また金正喜關係を中心とする書畫資料の多くは、先年、ご子息の藤塚明直氏によって韓國の秋史博物館に寄贈された。筆者が入手した遺品は、いわばその碩果僅存であるが、中には『清朝文化東傳の研究』に言及されていない資料もある。この點に鑑み、筆者は二〇一五年二月二二日、京都大學人文科學研究所において遺品の展示會と關連の講演會を開催し、簡單な目錄解題と講演資料を刊行した[2]。本稿では、そのうち清朝と朝鮮の交流に關するものに限り、目錄解題の誤りを訂正するとともに、そこでは述べられなかった事實とその背景をやや詳しく紹介することにしたい。

二　布衣詩人、劉栻が金命喜に贈った諸日如「墨竹圖」（掛軸）

阮元など清朝第一級の文人、學者と交際したことで知られ、『清朝文化東傳の研究』でその事跡が詳細に檢證された金正喜の弟、金命喜（一七八八―一八五七、號は山泉）が、一八二二年（清・道光二、朝鮮・純祖二十二）冬至兼謝恩正使として燕行した父の金魯敬（號は西堂）に子弟軍官として隨行した時に、北京でもらったものである。『清朝文化東傳の研究』第二「歸東篇」第十章二「西堂・山泉の燕行」に、金命喜が北京で交流した清朝文人の一人として劉柏鄰（柏鄰は劉栻の字）をあげるが、この繪については言及がない。「墨竹圖」の左右兩側に、以下の文言が墨書してある（原文字體は正體に改める。また句讀は筆者による。以下同）。

諸日如先生以中鋒畫竹爲國初宗匠。此其眞跡也。惜損破，重裝之，猶足滌人心志。癸未春晤山泉於京邸。其言論丰采有大過人者，遂締交。因以贈之，爲祝他日凌雲（以上右側）之勢有如此者。日如名升，錢塘人。道光三年正月廿有八日，識於一石山房。柏鄰劉栻。「燕都／劉栻」〈陰刻朱方印〉「老／柏」〈陽刻隷體朱方印〉（以上左側）

諸日如先生は中鋒の畫竹を以て國初の宗匠たり。此れ其の眞跡なり。惜むらくは損破すれども、重ねてこれを裝するに、なお人の心志を滌（あら）うに足れり。癸未（一八二三）の春、京邸に於いて山泉に晤う。其の言論と丰采は大いに人に過る者あり、遂に交りを締す。因りて以てこれを贈り、ために他日凌雲の勢い此の如き者あらんことを祝す。日如の名は升、錢塘の人。道光三年正月廿有八日、一石山房に於いて識す。柏鄰劉栻。

劉栻（生歿年不明）は、張之洞『（光緒）順天府志』卷一二六「藝文志五」に、「劉栻，一石山房詩一卷，存。栻字柏鄰，寶坻人，布衣」、また陶樑『國朝畿輔詩傳』（道光十九年紅豆樹館刻本）卷六十に、「栻字柏鄰，寶坻人，布衣。有一石山房詩一卷」とあるが、無名の詩人といってよいであろう。出身地の寶坻は、天津の北。この時、北京にいて金魯敬、命喜父子と交際したらしい。

金命喜は、字は性源、號は山泉。一八一〇年（純祖十）に進士となり、弘文館提學から江東縣令に至る。燕行時、北京で金石學者の劉喜海、吳蘭雪たちと交際したこと、また歸國後、劉喜海に朝鮮の金石拓本を贈り、その『海東金石苑』の編纂を助けたことは、『清朝文化東傳の研究』にみえる。

諸升（または諸昇　一六一七―一六九〇以後）は、杭州の人、字は日如、號は曦庵（『國朝畫徵錄』[3]）。『芥子園畫傳』二集の「蘭譜」と「竹譜」の原畫を描いたことで知られる[4]。ただしこの「墨竹圖」には落款がなく、傳存するその眞作[5]に比べると、構圖は似ているが筆のタッチが粗い。劉栻は「眞跡」であると言っているが、疑問であろう。しかし一介の布衣詩人が、自分の珍藏する繪畫をわざわざ表裝しなおして、言葉も通じない見ず知らずの異國の青年に贈り、その將來を祝福する態度からは、朝鮮を屬國とみなす中華思想的な優越意識は感じられない。「他日凌雲の勢い此の如き者あらんことを祝す」という言葉は、自らの果たせなかった夢を、この異國の若者に託したかのようにも讀めるであろう。

三　清朝文人が柳得恭に贈った扇面

柳得恭（一七四九―一八〇七）は、十八世紀の朝鮮に起った、いわゆる北學派實學者の代表的人物の一人である。字は惠甫、號は惠風、泠齋、泠庵、古藝堂など。『熱河日記』の著者として有名な朴趾源に師事し、一七七四年（英祖五十）に司馬試に合格、一七七九年（正祖四）に、李德懋、朴齊家、徐理修とともに王室圖書館である奎章閣の檢書となり、當時、四檢書と呼ばれた。また朴齊家、李德懋、李書九と共に漢學四家とも稱される。詩文集に『泠齋集』、『古藝堂筆記』などがある。

その燕行は二度にわたり、まず一七九〇年（乾隆五十五、正祖十四）に進賀副使、徐浩修の從官として朴齊家と共にはじめて清に行き、その見聞を『熱河紀行詩註（灤陽錄）』にまとめた。ついで一八〇一年（嘉慶六、純祖元）に謝恩使に隨行して再度、朴齊家と燕行、『燕臺再遊錄』を著す。二回の燕行中、紀昀、李調元、李鼎元、阮元、羅聘、陳鱣、黃丕烈など、當時の錚々たる學者、文人と交流したことは、『清朝文化東傳の研究』總説第六章「朴楚亭・柳惠風の入燕と清儒」に詳しい。

以下に紹介する扇面四點は、すべて再遊の時に北京で清朝の文人から贈られたもので、うち①②③については『燕臺再遊錄』に關連記事がある。ただし『清朝文化東傳の研究』では①のみが言及されている。

①　曹江「送別詩及隸書扇面」

奇緣萬里種，握手一歡然。疋望中朝著，新詩古驛傳。投情縞紵外，歸路海雲邊。縱復來持節，相逢也隔年。

柳君惠風，予遇之書肆中。一見如故，相與訂交。既半月敘，君又將歸東海。正未知相逢何日，能不悵然。君屢索拙作，自顧不堪呈敎。君行有日，情不能已，姑踐昔言。知君他日偶一展玩，或憶及今日之敘云爾。海上玉水曹江未定艸。「玉水」（陽刻朱印）

奇緣萬里の種、握手して一たび歡然たり。疋（雅の古文）望は中朝に著れ、新詩は古驛に傳う。情の投ずるは縞紵（友人間の贈物）の外、歸路は海雲の邊。たとえまた來りて節を持するも、相逢うはまた年を隔てん。柳君惠風、予はこれに書肆中に遇う。一見して故の如く、相ともに交りを訂す。既に半月敘して、君またまさに東海に歸らんとす。正にいまだ知らず相逢うこと何れの日なるやを、能く悵然たらざるや。君しばしば拙作を索むるも、自ら顧て呈敎に堪えず。君行くに日あり、情已む能わず、姑く昔言を踐す。君他日たまたま一たび展玩すれば、或いは今日の敘に憶い及ばんことを知ると云うのみ。海上玉水曹江、未定の艸。

ついでさらに次の隸書の一文がある。

皇王施令，寅嚴宗誥。我有絲言，兆民尹好。惠風先生復索八分，不敢方命，聊博一哂。玉水又書。

皇王令を施し，宗誥を寅（つつし）み嚴（おごそか）にす。我に絲言あれば，兆民まさに好む。惠風先生また八分を索む，敢えて命に方（たが）わず，いささか一哂を博す。玉水また書す。

この扇面は『清朝文化東傳の研究』卷頭の圖版12に掲げる。曹江（生歿年不明）については、同書第一「燕行篇」第二章「阮堂の入燕と

曹玉水」、また第二「歸東篇」第十一章「曹玉水・周吉人・陳石士と阮堂」に詳しい。彼はこの時、柳得恭に會ったのを緣として、後に金正喜、命喜兄弟とも交際した。この時期の朝鮮と清朝交流史上の重要人物である。

以下、『清朝文化東傳の研究』の記述と一部重複しつつ、同書がふれていない事實を補うことにする。まず曹江については、柳得恭『燕臺再遊錄』[6]辛酉四月十五日の條に次の記事がある。

曹江字玉水，江蘇青浦人。書肆中識之。年二十一，美姿容。問其所寓，正陽門外蔣家衚衕雲閒會館也。出游琉璃廠，時多歷訪。見其獨處習隸書，日益親，備問家閥。玉水父錫寶，字劍亭。乾隆末，以監察御史劾奏大學士和珅。現贈副都御史。玉水恩給七品廕生。奉母寓居京師。聘戶部尙書朱珏從孫女。曹習菴仁虎，乃其同宗叔輩。副都御史陸錫熊、王蘭泉昶子肇嘉，皆其姊夫也。姻族多名流，而性沈靜可喜。約游廠中，則不肯曰：「此名利場，易招謗。」其言又是也。臨別贈余扇。題詩云：「奇緣萬里種，握手一歡然。雅望中朝著，新詩古驛傳。投情縞紵外，歸路海雲邊。縱復來持節，相逢也隔年。」又以劉中堂墉一對及其館師唐晟一對見贈。余一日訪玉水，（中略）玉水謂余曰：「每見君呼僕人，似是伊隆納。何也？」余曰：「我見君呼僕，曰來啊。此之類也。」玉水曰：「君何其長也？」余曰：「君何其短也？」與之一笑。（下略）

曹江字は玉水、江蘇青浦の人。書肆中にこれを識る。年二十一、姿容美し。其の寓する所を問うに、正陽門外蔣家衚衕の雲閒會館なり。琉璃廠に出游するに、時に多く歷訪す。其の獨處して隸書を習うを見て日に益ます親しく，備に家閥を問う。玉水の父錫寶、字は劍亭。乾隆末に監察御史を以て大學士和珅を劾奏し、現に副都御史を贈らる。玉水は恩にて七品廕生を給せられ、母を奉じて京師に寓居し、戶部尙書朱珏の從孫女を聘す。曹習菴仁虎は乃ち其の同宗の叔輩、副都御史の陸錫熊、王蘭泉昶の子肇嘉は皆其の姊夫なり。姻族は多く名流、しかして性は沈靜喜ぶべし。約して廠中に游ばんとするに，則ち肯んぜず、曰く、「此れ名利の場、謗を招き易し」と、其言又た是なり。別れに臨みて余に扇を贈る。題詩に云う、「奇緣萬里種，握手一歡然。雅望中朝著，新詩古驛傳。投情縞紵外，歸路海雲邊。縱復來持節，相逢也隔年。」又た劉中堂墉の一對及び其の館師唐晟の一對を以て贈らる。余一日玉水を訪ぬるに、……玉水余に謂て曰く、「君僕人を呼ぶを見るたびに、是れ伊隆納に似たり。何ぞや」と。余曰く、「我れ君の僕を呼ぶを見るに、曰く來啊と。此の類なり」と。玉水曰く、「君何ぞ其れ長きや」と。余曰く、「君は何ぞ其れ短きや」と、之と一笑す。

これによると二人は瑠璃廠の書肆で偶然知り合い、ノッポ、チビと互いに戯れるまで急速に親しくなった。曹江が尋ねた「伊隆納」は、朝鮮語の「이리 오너라（iri oneora）」すなわち「こっちに來い」という意味で、中國語の「來啊」に當たる。柳得恭は中國語を多少解したらしい。しかし交流はおもに筆談に由ったであろう。

曹江の父、曹錫寶（一七一九―九二）は、一七五七年（乾隆二二）の進士で、官は陝西道監察御史に至る。權臣、和珅を彈劾して罷免されたが、死後、和珅の失脚により副都御史を追贈された。その傳は『清史稿』卷三二二にあり、子の曹江は恩廕により官に就き、また能文の者に乞うて父祖の功績を詩歌に詠み世に傳えたことが見える。[7]曹江は名門の貴公子と言ってよい。

その五律の詩は、送別に當たり異國の友人を思う情愛に溢れているが、柳得恭のさらなる求めに應じて書いた八分（隸書）の文句はやや趣が異なる。「皇王施令」云々は、『文心雕龍』「詔策篇」の「贊」である。これは、天子の命令に萬民がつつしみ、かつよろこんで從うという意味で、相手が朝鮮の使節であることを意識して書いたに違いない。柳得恭は『燕臺再遊錄』において、送別の詩はもとより、曹江の餞別の品やエピソードを詳しく記錄しているにもかかわらず、なぜか同じ扇面に書かれたこの『文心雕龍』の贊には觸れていない。これはなぜであろう。

柳得恭に「渤海考」という文章がある。これは七世紀から十世紀にかけて、現在の中國東北地方にあった渤海國の歷史、地理、制度についての論考であるが、その序文にみえる執筆意圖を要約すると、朝鮮王朝の前の高麗が、それ以前の新羅、百濟、高句麗の歷史について『三國史記』を撰したのは當然であるが、渤海は高句麗の遺民が建てた國であり、新羅とは南北國の關係にあったのに、その歷史を書かなかったのは不當であり、渤海の歷史を正確に記錄して、その故土に對する主權を契丹や女眞に主張すべきであった、高麗が弱國となったのは渤海の故地を得られなかったためであり、そこでおそまきながら「遂に渤海の事を撰次した」と言うのである。(8)

よく知られるように、この時期の朝鮮の知識人は、いわゆる小中華思想をもち、清朝を夷狄視していた。柳得恭らの北學派は、從來のこのような清朝蔑視に對する反省から、現實の清朝の先進文化を攝取しようとして起ったのであるが、彼らの對清朝觀も、根本的には小中華意識を完全に拂拭したものではなかったらしい。それどころか柳得恭は、清朝の祖先の地である滿洲は、高句麗、渤海、高麗を繼承した朝鮮の領土であると考えていたことを、右の「渤海考序」は物語っている。「渤海考」が書かれたのは一七八四年（正祖八）、すなわち最初の燕行の六年前であり、彼が早くからこのような考えをもっていたことがわかる。『燕臺再遊錄』には、彼が「渤海考」の義例を紀昀に贈ったことがみえている。(9)

一方の曹江は、滿州族統治下の漢民族としての屈折はあったものの、清朝高級官僚の子弟にふさわしい中國中心の天朝思想をもっていたであろう。彼が柳得恭の求めに應じた揮毫に、わざわざ中國皇帝の政令の普遍性を說く『文心雕龍』の贊を選び、柳得恭がそれを無視して記錄にとどめなかったところに、兩者の微妙な行き違いが示されていよう。すなわち個人的な友誼は友誼として、兩者の國家觀には大きな隔たりがあったのであり、そのような國家觀の齟齬を棚上げしたところで、兩者の個人的友誼は成り立っていたのである。なお柳得恭の友人、同志であり、二度の燕行を共にした朴齊家は、「渤海考」のために序文を書いているが、(10)そこで彼が述べていることも柳得恭の主張とほぼ同じで、このような考えが決して柳得恭一人のものではなかったことがわかる。

ちなみに、彼らが渤海に注目したのは、當時、日本通信使によってもたらされた渤海と日本との外交關係に關する知識がひとつの刺激になった可能性がある。柳得恭、朴齊家の友人で、やはり燕行の經驗のある李德懋は、柳得恭の「渤海考」に關連して、「渤海通日本」(11)を書いたが、これは『續日本紀』から渤海關係の記事を引用したものである。これら日本についての情報は、一七六三年（日本・寶曆十三、朝鮮・英祖三十九）に來日した第十一次の通信使節、特に歸國後『和國志』を著した書記の元重舉によってもたらされたもので、李德懋が

『和國志』を參考として書いた『蜻蛉國志』[12]にも、やはり渤海と日本の交流についての記事がある。柳得恭には『蜻蛉國志』の序、また元重舉らによってもたらされた日本人の詩を李書九が選んだ『日東詩選』の序があり[13]、日本についてもかなりの知識をもっていたらしい。彼ら北學派に於いては清朝とともに日本への關心も見られ、兩者はつながっていたと考えられる。

② 沈剛「梅花圖題詩扇面」

冷澹孤高清瘦奇。此花惟有此君知。自從和靖先生後，不着人間一句詩。書澹吟樓句，爲古藝先生政。唐亭沈剛。「唐亭」（陽刻朱印）

冷澹にして孤高たり清瘦の奇。此の花は惟だ此の君有りて知る。和靖先生の後より，人間一句の詩を着せず。澹吟樓の句を書し、古藝先生の政（正と同じ）の爲にす。唐亭沈剛。

沈剛およびその扇面詩については、『燕臺再遊錄』四月十五日に次のようにみえる。

沈剛號唐亭，江蘇松江人，皇明侍講學士度後孫。曹玉水處識之。玉水每戲之曰：「此公雖孝廉，胸中却無一個字，只善畫梅。」余曰：「孝且廉，何必多識字？」尋得其梅花一幅，果好。題朱子詩句云：「仙人氷雪姿，貞秀絶倫儗。」又於扇面寫梅贈余，題云：「冷澹孤高清瘦奇。此花惟有此君知。自從和靖先生後，不着人間一句詩。」筆蹟亦妙絶。詩稱澹吟樓句，不知誰作。甚佳，或其自號爾。

沈剛號は唐亭、江蘇松江の人、皇明の侍講學士度の後孫。曹玉水の處にて之を識る。玉水つねに之に戲れて曰く、「此公孝廉（舉人）と雖も，胸中却て一個の字なく、ただ善く梅を畫く」と。余曰く、「孝にして且つ廉なれば、何ぞ必ずしも多く字を識らん」と。尋いで其の梅花一幅を得たるに果して好し。朱子の詩句を題して云う、「仙人氷雪の姿，貞秀倫儗を絶す」と。また扇面に梅を寫して余に贈る、題に云う、「冷澹孤高清瘦奇。此花惟有此君知。自從和靖先生後，不着人間一句詩」と。筆蹟亦た妙絶。詩は澹吟樓の句と稱するも、誰の作やを知らず。甚だ佳し、或いは其れ自ら號すのみ。

これによれば、沈剛は曹江の友人であった。沈剛（生歿年不明）、字は心源、號は唐亭、また唐堂。婁縣（現在の上海市松江）の人。舉人。蘭竹畫、篆刻をよくす。葉爲銘『廣印人傳』卷十二に見える[14]。朱子の詩句は絶句「梅堤」の前半（『晦庵集』卷三、「儗」はもと「擬」）、この「梅花一幅」は傳わらない。その先祖、沈度は永樂間の宮廷書家で、『明史』「文苑傳」（卷二八六）に傳がある。

澹吟樓の詩、柳得恭は沈剛自身かと疑うが、これは沈剛の同鄕の先輩詩人、張梁の作である。張梁（一六八三―一七五六）、字は奕山、號は幻花居士。婁縣の人、一七一三年（康熙五二）の進士。武英殿纂修官となり、のち官を辭して鄕里に隱棲した。『國朝詩人徵略』卷二一、『湖海詩傳』卷一に傳がある。「冷澹孤高」云々の七絶は、その『澹吟樓詩鈔』卷八[15]に「題畫梅」として見え、字句に異同はない。沈剛は同鄕の先輩詩人の詩をもって、異國の友人の歸國を送ったのである。

③ 章寶蓮「墨竹扇面」

畫竹不在多，數竿亦已足。夜半起秋風，蕭蕭戛寒玉。泠齋先生政。章寶蓮。「寶蓮」（陰刻朱印）「虎伯」（陽刻朱印）

竹を畫くは多きに在らず，數竿また已に足れり。夜半秋風起り，蕭蕭として寒玉を戛す。泠齋先生政せ。章寶蓮。

『燕臺再遊錄』辛酉四月十五日に、「章寶蓮，字虎伯，江南嘉定人。贈余墨竹畫扇。題詩云：畫竹不在多，數竿亦已足。夜半起秋風，蕭蕭戛寒玉」と、本詩が記錄されている。

章寶蓮は、端方の『壬寅銷夏錄』にその詩が記錄されている[16]ほか、盛大士『蘊愫閣詩集』（道光元年刻本）卷七に盛大士と章寶蓮の「韜光寺聯句」が見えるが、詳しい事跡は不明である。

④　張道渥「水墨畫扇面」

「水屋道人，爲泠齋先生作」と署名し、「水」「屋」の二印（陰刻朱印）を鈐す。張道渥については『燕臺再遊錄』に記述がないが、一七九二年（乾隆五七、正祖十六）の冬至使に隨行した金正中の『燕行錄』[17]翌年三月十六日の條に、「張道渥，字水屋，號夢覺，太原人。善詩畫，尤工指隸。官至揚州刺史，今爲落職在家」とあり、朴齊家の詩には後に復職したことが見える[18]。

張道渥、字は水屋、封紫，號は竹畦，また張風子、山西平陽府浮山縣の人で、詩書畫ともに善くしたと言う。『晩晴簃詩匯』卷一〇三に、「張道渥，字水屋，浮山人，諸生。官覇州知州，有『水屋剩稿』」として詩一首を錄し[19]、『清詩紀事』にも關連記事がある[20]。また翁方綱と親交があったようで[21]、柳得恭の友人、朴齊家、李德懋は翁方綱と交渉があり、あるいはその縁で張道渥と知り合ったのであろう。しかし指隸（指で書いた隸書）に巧みであったことは、中國の資料には見えないようである。

四　周壽昌が曹寅承に贈った「書董其昌倣米畫題扇面」と「秋江詩趣圖扇面」

前者には、以下の題字がある。

米元章作畫，一正畫家謬習。觀其高自標置，謂無一點吳生習氣。又云：王維之跡，殆如刻畫，眞可一笑。蓋唐人畫法至宋乃暢，至米又一變耳。

董文敏倣米畫自跋，臨似東谷星使兄臺雅屬。時壬午仲春。自菴周壽昌。「自盦」（陽刻朱印）

米元章畫を作り、一に畫家の謬習を正せり。其の高く自ら標置するを觀るに、謂らく一點の吳生（吳道子）の習氣もなし。又云う、王維の跡、殆んど刻畫の如く、眞に一笑すべし。蓋し唐人の畫法は宋に至りて乃ち暢び、米に至りてまた一變せしのみ。

董文敏の米の畫に倣うの自跋、東谷星使兄臺の雅屬に臨みて似（示と同じ）す。時に壬午仲春。自菴周壽昌。

「米元章作畫」云々は董其昌（諡は文敏）『畫禪室隨筆』卷二「倣米畫題」の前半である。

後者には、「秋江詩趣，自道人隨意仿元人筆」（秋江詩趣、自道人隨意に元人の筆に仿う）とあり、「自盦」（陰刻朱印）を鈐す。

周壽昌（一八一四―八四）は、湖南長沙の人で、字は應甫，號は自庵。一八四五（道光二五）の進士。翰林院に入り、光緒年間には內閣學士兼禮部侍郎に至る。著に『思益堂詩集』、『前漢書注校補』あり。『晩

晴簃詩匯』巻一四七、孫雄『道咸同光四朝詩史』甲集巻二（清宣統二年刻本）に傳がある。

扇面を贈られた東谷とは、壬午すなわち一八八二年（光緒八、高宗十九）の前年の朝鮮冬至使書狀官であった曺寅承（一八四二―九六）の號である。[22] 一八八二年といえば、日本の壓力により朝鮮が開國した江華島條約（一八七六）の後、壬午軍亂が發生、日本公使館が朝鮮の反亂軍により襲撃され、日本との間に濟物浦條約が締結された年である。日清戰爭の前夜、東アジアの國際情勢が大きく變化した時期であり、曺寅承は一八九一年には冬至使の副使として再度、北京に赴いた。[23] 清朝への冬至使の派遣は、この翌年、一八九二年（高宗二九）が最後である。その後は吏曹參判、協辦內務府事、中樞院一等議官などを歷任、日本との外交交渉に當たったが、一八九六年、春川府觀察使の任中に、日本による閔妃殺害事件後に蜂起した義兵によって殺され、死後、正二品奎章閣大提學、諡忠憲を追贈されている。[24]

以上、朝鮮の燕行使節、金命喜、柳得恭、曺寅承の三人に贈られた清朝文人の書畫について紹介した。これらの文人は、朝鮮使節が同時期に交流した紀昀、李調元、阮元、黃丕烈などの有名人にくらべれば、重要性、話題性ともに遜色があろうが、燕行使と清朝文人の交流の裾野の廣さを知るうえでは、なお價値を有するであろう。

五　「金德雲墓碑」と「誥命碑」拓本

藤塚博士の遺品の中には、前記の文人との交流に關する物のほかにも、清朝と朝鮮の複雜な關係を物語る興味深い資料がある。

① 「金德雲墓碑」拓本

朝鮮國折衝將軍、僉知中樞府事、大清誥贈光祿大夫、加贈太子太保、領侍衛內大臣、愨勤公、金公德雲之墓。朝鮮國淑夫人、大清誥贈一品夫人崔氏祔左。

② 「誥命碑」拓本

奉天承運皇帝制曰：國有爪牙之選，克宣力於旂常。朝頒綸綍之榮，必勤思於水木。用褒先世，以大追崇。爾德雲乃管理上駟院院務、散秩大臣、提督南海子、總理鳥鎗兼佐領、加二級常明之曾祖父。樹德務滋，發祥有自。敦詩說禮，克垂樽俎之猷。勇戰敬官，早裕熊羆之略。茲以覃恩，贈爾爲光祿大夫，錫之誥命。於戲。懋功有賞，榮則遡於所生。慶典欣逢，恩不忘其自出。加茲寵秩，尙克欽承。乾隆二十四年，加贈太子太保、領侍衛內大臣、愨勤公。雍正元年誥命。乾隆二十四年加贈。五十六年改竪。（訓讀省略）

この兩者はあるいは同じ碑の表と裏であったかとも思えるが、拓本だけでは確認できない。內容は要するに、雍正元年（一七二三）に「管理上駟院院務」等の官にあった常明なる人物の曾祖父である朝鮮の金德雲と妻の崔氏に對する追贈と乾隆二十四年（一七五九）における加贈を述べたものである。うち「誥命碑」は柳得恭の『灤陽錄』に引用されており、その說明によると常明は朝鮮義州の出身で、乾隆時の工部尙書、金簡は常明の從孫であると言う。[25] また『朝鮮王朝實錄』の中にも關連記事が多數あり、それによると、常明の曾祖父は清の太宗が朝鮮に侵攻した丁卯胡亂（一六二七）の時に捕虜となったが、常明の母が康熙帝の乳母であったため、康熙、雍正兩帝の寵愛を受け出世し、その先祖の墓碑を故鄕の義州に建てたもので、朝鮮使節のために種々の便宜を圖り、[26] 特に『明史』編纂時において、その「朝鮮傳」の內容が有利になるよう斡旋したという。[27] 康熙帝の乳母といえば、『紅樓夢』

の作者、曹雪芹の曾祖父、曹璽の妻、孫氏が有名であるが、常明の母とは、順治、康熙兩帝の保母で、奉聖夫人を贈られた朴氏を指すようである。[28]

なお常明の從孫、金簡[29]（？―一七九四）は、四庫全書副總裁また武英殿聚珍版の總責任者として有名であり、その妹は乾隆帝の妃（淑嘉皇貴妃）であったが、やはり朝鮮使節を優遇し、武英殿聚珍版の木活字を朝鮮使節に讓渡もしくは賣却した可能性があるという。[30]「金德雲墓碑」は、常明、金簡など清朝內部の朝鮮出身者の活動を考えるうえで貴重な資料であろう。清朝皇帝が朝鮮國王の頭越しに、その陪臣に官位を追贈するのはきわめて異例である。

六　乾隆帝または雍正帝を朝鮮人とする傳說

上記「金德雲墓碑」について、藤塚博士が京城帝大在職時に、その現狀と關連情報を義州邑から收集した資料が遺品の中にあるが、そこに當地の傳說として「皇后の產兒取換」と題する話がみえる。

時ノ清帝ハ多クノ女ノ子ヲ持ッテ井乍ラ一人ノ男ノ子ヲ持ッテ井ナカッタ爲ニ皇后ノ男ノ子ヲ產マレルコトヲ非常ニ待ッテ井ラレタ。然ルニ皇后ハ孕娠シタケレドモ皇后自身ニ於テモ今回モ亦女ヲ產デハ愈々皇帝ヲ失望サセテハナラヌト思ヒ、若モ女ノ子ヲ產ンダ場合ニ如何ニスベキカト種々ト思案ヲシテオラレタ。時恰モ金常明ノ妻モ殆ド時ヲ同ジフシテ孕娠シテ井タノデ、皇后ハ祕カニ金尙明[ママ]ノ妻ヲ呼ンデ若シ自分ガ女ノ子ヲ產ンデ、金常明ノ妻ガ男ノ子ヲ產ンダ場合、素早ク產兒ヲ交換シテ皇帝ノ滿足ヲ買ハントシテ密約ハ成立シタ。孕期滿チテ愈々御產ガアッタガ、果セルカナ皇后ハ女ノ子、金常明ノ妻ハ男ノ子ヲ產ンダノデ、約束ニ從ヒ素早ク產兒ヲ交換シタ。

要するに金常明の妻が生んだ子が皇子になったという傳說である。皇帝が誰であるかは書いてないが、常明の年代からすれば康熙帝もしくは雍正帝であろう。つまりすり替えられた皇子とは雍正あるいは乾隆となる。

この話は、雍正帝が生まれた子を海寧の陳世倌の子と取り換えたので、乾隆帝は、實は陳世倌の子であるとする、いわゆる乾隆漢人說とよく似ていよう。この傳說は清代にはすでにあったと思えるが、當然ながらその時期の記錄はなく、[31]比較的早く、かつよく知られるものとしては蔡東藩の『清朝通俗演義』[32]（一九二六）があり、現在では金庸の武俠小說『書劍恩仇錄』によってあまねく人口に膾炙している。右の朝鮮の傳說が中國の影響か否かは不明であるが、いずれにせよ滿州人に征服された漢民族と朝鮮に同類の傳說があることは興味深い。

七　おわりに

朝鮮の燕行使および通信使と中國、日本の文人との交流については、近年その國家を越えた個人としての關係を重視して、これを東アジアの文藝共和國とよぶ說が提唱されている。[33]文藝共和國という呼稱は、おそらくヨーロッパの學問の共和國（La République des Lettres）にヒントを得たものであろう。[34]この概念を東アジアに初めて援用したのは、中村眞一郎『木村兼葭堂のサロン』（新潮社　二〇〇二）であるかと思える。中村は兼葭堂のサロンおよびその朝鮮通信使との交流を「文學共和國」また「知的共和國」と呼んでいる。ただ同書では、朝鮮通信使が兼葭堂を訪問し、そのサロンに參加したように書かれてい

るが、これはむろん誤解であった。通信使にはそのような行動の自由はあたえられていなかったのである。

十八、十九世紀の東アジア知識人の交流に、文藝共和國と稱するに相應しい一面があったことは事實であろう。しかし同時にそこには、本稿で述べた曹江と柳得恭との交流に見られるような國家觀、民族觀の矛盾が隱されていたことも、また否定できない。このような儒教的教養と漢詩漢文の能力に基づく個人間の友情と相互の國家觀の矛盾は、日本を訪れた朝鮮通信使と日本の文人、學者との筆談記錄にも實は見られるものであった[35]。

あるいはこの時期の朝鮮と清朝との交流の諸相につき、より視野を廣げるならば、「金德雲墓碑」や乾隆帝漢民族、朝鮮人傳說のように、錯綜した國家關係と民族意識の齟齬が、そこに胚胎していることにも氣づかされる。それは近代を經て、現代にまでつながる問題であろう。ここで紹介した藤塚博士のわずかな遺品は、そのことを物語っているかのようである。

注

（1）藤塚鄰著、藤塚明直編『清朝文化東傳の研究―嘉慶・道光學檀と李朝の金阮堂』（國書刊行會　一九七五）。

（2）金文京編『藤塚鄰博士遺品展示會目錄解題・講演會「東アジア近世の書籍文化交流」資料』（京都大學人文科學研究所　二〇一五）。講演は鄭珉（韓國漢陽大教授）、陳正宏（中國復旦大教授）、藤本幸夫（京大人文研客員教授）の三氏による。なお遺品は、燕行使關係のものは高麗美術館に寄贈、その他は京大人文研所藏。

（3）張庚『國朝畫徵錄』（乾隆四年蔣泰刊本）卷上「魯得之」の條に、「繼起者推仁和諸昇、山陰王嶧。昇字日如，號曦庵。筆亦勁利，然失之勻矣」とある

（4）『芥子園畫傳』二集（大東急文庫藏康熙刊本影印　勉誠出版　二〇〇九）の沈心友「畫傳合集例言」に、「王蘊菴（王質）、諸曦菴，武林名宿也。聞畫傳二集之請，兩先生白髮蕭蕭，欣然任事，三年乃成。蘭竹二種俱曦菴所作，蘊菴佐之」とあり、また「蘭譜」の冒頭に諸昇「蘭竹譜序」がある。同書第三册、小林宏光「中国畫譜の集大成―『芥子園畫傳』初集・二集・三集の全貌」にも諸昇について簡單な說明がある。

（5）前揭小林宏光論文の諸昇「竹叢雙禽圖」（圖十六）。また中國の大紀元文化網 http://wwwga.epochtimes.com/b5/3/5/5/c12708.htm に泰州市博物館藏の諸升「墨竹圖」の畫像がみえる。

（6）林基中編『燕行錄全集』第六〇册、東國大學校出版部、二〇〇一、中國復旦大學文史研究院・韓國成均館大學東亞學術院大東文化研究院合編『韓國漢文燕行文獻選編』卷二五、復旦大學出版社、二〇一一。また韓國古典翻譯院のデータベースで全文檢索できる。

（7）『清史稿』卷三二二「曹錫寶」（中華書局標點本三三册）に、「錫寶贈副都御史，其子江視贈官予廕。錫寶，一士從子，再世居臺省，敢言名。家有甕，焚諫草，江嘗乞諸能文者爲詩歌，傳一時云」とある。

（8）柳得恭『泠齋集』卷七「渤海考序」、『韓国文集叢刊』二六〇册、ソウル、民族文化推進會、二〇〇〇。

（9）『燕臺再遊錄』四月一五日に、「曉嵐）謂余曰，如有所著書種，示我以義例。余問何用。答我現充四庫全書校勘之任。天下書如未得全本者，但編入義例。余曰，我非噉名客。既勤苦索，故錄贈渤海考義例」とある。

（10）朴齊家「渤海考序」、『貞蕤閣文集』卷一、『韓国文集叢刊』二六一册。

（11）李德懋『青莊館全書』卷五四「盎葉記」一、『韓国文集叢刊』二五八册。

（12）『青莊館全書』卷六五『蜻蛉國志』の「異國」の條。

(13) ともに『泠齋集』卷七にみえる。

(14) 『廣印人傳』(宣統二年　西泠印社刊)、『印人傳集成』(汲古書院　一九七六)二二三頁。

(15) 『澹吟樓詩鈔』(上海古籍出版社　二〇一〇、影印乾隆二二年刊本)。

(16) 端方『壬寅銷夏錄』「癸亥夏日，定軒先生出示戒壇先祠圖册。謹題五律四首，以志景仰。今秋先生復繪此圖，欲奉諸祠，因重書之。時甲子七月二十五日也。嘉定章寶蓮拜藁。」

(17) 『燕行錄全集』第七五册。

(18) 『貞蕤閣四集』「燕京雜絶。贈別任恩叟姊兄、追憶信筆。凡得一百四十首」其三十一に「輶軒聞所聞，風子得官去。傲吏無世情，狂名落何處。張道渥，字水屋。罷官楊州鹽運。自稱風子，聞飄(?)復以知州用。」

『韓国文集叢刊』二六一册。

(19) 徐世昌『晚晴簃詩匯』(中華書局　一九九〇)第五册卷一〇三、四三五八頁。また同書卷一〇二「法式善」に「和張水屋道渥遊西山詩」がある(四二八六頁)。

(20) 錢仲聯『清詩紀事』(江蘇古籍出版社　一九八九)第十一册乾隆朝卷七七一一頁。

(21) 翁方綱の「跋楊忠愍公墨迹卷」(『復初齋文集』卷三一、續修四庫全書第一四五五册)に、「浮山張水屋藏此卷，持來蘇齋俾予敬誦而題其後」とある。

(22) 『高宗實錄』十八卷，十八年十月二十九日に「召見冬至三使臣。正使洪鍾軒、副使金益容、書狀官曺寅承」とある。略傳は『韓国民族文化大百科辭典』(韓国精神文化研究院　一九九一)に見え、揭載書幅に「東谷居士」とある。

(23) 『高宗實錄』二七卷二七年十一月十三日に「召見冬至三使臣。正使李珪永、副使曺寅承、書狀官鄭雲」とある。

(24) 『高宗實錄』三四卷三三年二月十日、『純宗實錄』四卷、隆熙四年(一九一〇)七月十八日の項參照。

(25) 『灤陽錄』(『遼海叢書』)卷二「圓明園扮戲」に、「工部尚書金簡者，常明之從孫。常明卽我義州人，僉中樞德雲曾孫。德雲墓在州南山」とある。

(26) 『景宗實錄』十三卷，三年(一七二三　雍正元年)九月十日に、「都承旨金始煥，仍陳常明本末曰：此乃我國義州人子孫也。其曾祖丁卯被虜，而其母於康熙有阿保之功，故其子孫爲康熙所愛恤。常明仍襲世職，方帶烏鎗摠管。通官輩皆其部下也。亦爲新皇所偏愛，新蒙寵擢，昵侍左右。譯舌輩居閒往來，渠言身雖在此，心不忘本。本國凡事，極力周旋云、」

『英祖實錄』七卷，一年(雍正三年)九月十二日に、「(左議政閔)鎭遠曰：我國事，金常明每盡力周旋，而常明之先墓在於我國地，故閒欲竪碑，而彼國贈以光祿大夫，且得我國折衝將軍之資必欲竝書云。未知渠何由得我國官資也，我國當爲之立碑，而亦當依其所願書之。以大清光祿大夫朝鮮國折衝將軍，可乎？　上曰：雖甚可笑，當以此書之矣」とある。

(27) 『英祖實錄』十一卷，三年(雍正五年)閏三月三日に、「蓋明史記我朝仁祖事，語多構誣，清國方修明史，故前後使行每請改而不許。是行也，清國執政常明者爲之周旋，略改字句，仍示謄本，使臣受還而猶未盡改矣」とある。

(28) 『聖祖仁皇帝御製文集』(四庫全書本)卷六「敕諭」に、「諭禮部：世祖章皇帝乳母朴氏，保育先皇，克昭敬愼。朕躬幼時，殫心調護。……今封爲奉聖夫人」とあり、『清朝實錄』「康熙朝」卷六七、康熙十六年七月庚子(二五日)にも同文がみえる。『清稗類鈔』「宮闈類」の「世祖乳母封奉聖夫人」參照。

(29) 『國朝耆獻類徵』初編卷九十(『清代傳記叢刊』十九册　明文書局　一九八六)六五七頁に傳がある。

(30) 陳正宏『東亜漢籍版本學初探』（中西書局　二〇一四）「乾隆庚戌辛亥朝鮮燕貿活字考」參照。

(31) 中國のネット「人民網」などによると、清末の天嘏『清代外史』に「弘曆非滿洲種」があるというが未見。

(32) 蔡東藩『清朝通俗演義』（浙江人民出版社　一九八〇）第三十回、三六回。許嘯天『清宮十三朝演義』（一九二六）にも見える。また孟森『海寧陳家』（北京大學出版部　一九四八）參照。

(33) 高橋博巳『東アジアの文藝共和國―通信使・北學派・兼葭堂』（新典社　二〇〇九）、정민（鄭珉）『18세기 한중지식인의 문예공화국（十八世紀韓中知識人の文藝共和國）』（文學トンネ　ソウル　二〇一四）。

(34) H．ボーツ・F．ヴァケ著、池端次郎・田村滋男譯『學問の共和國』（知泉館　二〇一五）參照。

(35) 金文京「『萍遇錄』と「兼葭堂雅集圖」―十八世紀末日朝交流の一側面」（『東方學』一二四輯　二〇一二）參照。

本論文は、二〇一五年度、韓國學中央研究院「韓國學世界化 LAB 育成事業」（2011-AKS―2011）による成果の一部である。